

剣道の切り返しについて一考察  
近代～現代の切り返しの内容に関する資料より

前阪 茂樹\*

One Consideration that is about “Kirikaeshi” of Kendo  
Regarding a content of modern ~ present “Kirikaeshi” it today data

Shigeki MAESAKA\*

Abstract

In a tournament sports, in order to make the technology improve as a measure and are training for exercise. At Kendo even though that isn't an exception. Call an exercise with “Keiko” on the way Japanese ancient martial arts and art to include a swordmanship-Kendo, then. “Keiko” of a denotation is to be called “are old from learn it as thinking about the matter to come down”. And think about how are creativity, to research on technology as a former constructs at a Keiko after all. From an exercise of Kendo is old a fundamental technological exercise becomes an importance.

“Kirikaeshi” of an exercise is the most important exercise method, inside a fundamental technological exercise of a swordmanship-Kendo. “Kirikaeshi” of are said to that an exercise is the best measure in order to tra I prewar had that practiced with a school of “Budo-Senmon-Gakkou-<martial arts special school>” then.

This research this time is to investigate how “Kirikaeshi” is a taking over at present for a content inside a history of Kendo. Then, my research purpose is since a modern age over modern times to know a change of a content of “Kirikaeshi”. I investigated as classifying a content of “Kirikaeshi” into an item of “method” “purpose” “effect” with my this research. And I may help full by obtaining this research data at an instruction of a swordmanship-Kendo.

**KEY WORDS:** *Kirikaeshi, Modern ~ Present Kendo, method, purpose, effect*

はじめに

あらゆる競技スポーツにおける場合と同様に、剣道においても、その技術を身につけたり上達させるためには、さらなる体力の向上をはかるための練習やトレーニングがおこなわれている。そし

て、剣道を含めた日本古来の武道や芸道では練習のことを「稽古」と呼ぶ。稽古とは元来「古（いにしえ）を稽（かんが）える」との字義上の解釈があり、古いことを学習すること、または習い達することという意味を持っており、先人の教えについて工夫、研究するということを要とする意味

\*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

である。

剣道における稽古は従来より基本の稽古、修練に重点が置かれている。中でも「切り返し」は剣道の稽古・修練の中で最も重要な要素であると言われており、特に戦前の武道専門学校等では剣道専門家育成・教育の最良手段として非常に重視されていた。競技化の進んだ現在においてもその思想は受け継がれている。

本研究では切り返しに関する資料を得、その方法、目的、効果、歴史的な変遷等をまとめて剣道の稽古・修行・指導上の基礎資料とすることを目的とする。

## 研究方法

「切り返し」に関する内容がどのように変遷してきたか、またどのような過程を経て現在の内容に至ったのかを知るために、まず現在における剣道（現代剣道）の「切り返し」の指導要領等を幼少年剣道指導要領等から抜粋し把握した上で、次に近代剣道名著大系（全巻、第1～14巻）の中から「切り返し」が単独の項目で掲載されている文献を選び、それらの著書名、著者名、刊行年と切り返しの方法、目的、効果、その他について検討し、さらに現在のものと比較しながら考察を加えた。

尚、選んだ文献はできる限り多くの資料を参考にしながら、その内容の代表的なものを時代順（明治・大正・昭和初期）に区分して選択し、表にした。

## 結果・考察

### 1. 現在の切り返しの内容

現在全日本剣道連盟が発行する「幼少年剣道指導要領」では、切り返しについて「切り返し（打ち返し）とは、正面打ちと連続左右面打ちを組み合わせた剣道の基本的動作の総合的な稽古法である。剣道を習う者にとっては初心者も熟練者も必ず行わなければならない大切な稽古法である。」<sup>1)</sup>と記している。

その内容は表1の通りである。

現在、一般的に行われている切り返しは全日本

表1. 現在の「切り返し」<sup>1)</sup>の内容

「幼少年剣道指導要領」	全日本剣道連盟,昭和60年初版刊
方法	(打ち方) 1. 正面を打ち前進しながら左右面4本、後退しながら5本、間合いをとり中段の構えから正面を打つ(これを1回とする)。正面→連続左右面→正面→連続左右面→正面 2. 連続左右面打ち中段の構えから充分振りかぶって左面を打ち、中段に復することなく頭上にてただちに手を返して右面を打つ。このようにして左面と右面とを交互に連続して打つ。左右面の角度はそれぞれ45度ぐらいとする。前進、後退、右開、左開など足さばきをつけて行う。 3. 正面→連続左右面打ち中段の構えから充分に振りかぶって正面を打ち、ただちに連続左右面を前進または後退しながら打ち、打ち終わったら双方が中段になるように間合いを充分に取り、ただちに振りかぶって正面を打つ。2回以上続けて行う場合には、前回の最後の正面打ちを次回の最初の正面打ちとして行なう。 (受け方) 4. 相互に中段の構えから、機を見て剣先を右に開いて正面を打たせる。ただちに連続左右面を後退または前進しながら打たせ、打ち終わったら双方が中段の構えになるように間合いを充分に取って、ただちに剣先を開いて正面を打たせる。この「正面→連続左右面→正面」の動作を適宜(数回)繰り返す。 5. 引き入れる受け方(特に初心者への打ちを受ける場合に用いられる)竹刀を垂直に立て、左こぶしを体の中心から左(右)に寄せて、相手の左右面打ちを引き込むようにして受ける。 6. 打ち落とす受け方(技量の上達した者の打ちを受ける場合に用いられる)左こぶしを体の中心からはずさずに、相手の打ちを迎えて打ち落とすようにして受ける。
目的	1. 剣道の基本的動作の修得 2. 気・剣・体一致の打突の修得
効果	1. 構え(姿勢)がよくなる。 2. 打ち(刃筋や手の内の作用)がよくなる。 3. 足捌き、間合いの取り方、呼吸法などが養われる。 4. 強靱な体力や旺盛な気力が養われる。
その他	1. 悪癖の矯正や予防 2. 準備・整理運動

剣道連盟が指定しているものが基本となる。方法としては正面打ちから連続左右面（前進4本後退5本の9本）の後正面打ち、これを2回繰り返す。この内容を「打ち方」と「受け方」に分け、「打ち方」では正面～連続左右面打ちの修得過程を指導上の留意点として取り扱っている。主な留意点として正しい姿勢、構え、間合い、竹刀の握りで大・強・速・軽、つまりはじめは正しい動作を（特に初心者は）ゆっくり大きく、次に打ちを強く、速く、そして熟練度に従って技を（最終的には）軽妙に行うという内容である。「受け方」では相手の熟練度（レベル）に応じた受け方を分けて説明している。

また、切り返しによって得られる効果やそれを行うときの留意点を井上は「打ち返し八徳」、「打ち返し五則」<sup>2)</sup> といっており、これは現在における切り返しの「目的及び効果」に値するものと考えられる。

#### 『打ち返し八徳』

- ① 気剣体一致の打ちができる。
- ② 無駄力をなくし技癖の矯正ができる。
- ③ 姿勢堅確となる。
- ④ 耐久性ができ氣息長くなる。
- ⑤ 目あかるく、間合いを覚える。
- ⑥ 体力増強し足腰が強くなる。
- ⑦ 気力旺盛となる。
- ⑧ 太刀の返りがよくなる。

#### 『打ち返し五則』(留意点)

- ① 大きく正しく。
- ② 間合いを正しくとる。
- ③ 左手は常に体の真ん中にとまり、右手は伸ばす。
- ④ 体で調子をとってはいけない。
- ⑤ 太刀の返りを利用して打つこと。

以上、上述したように現在における切り返しの位置づけは基本的動作の総合稽古法として捉えられている。

## 2. 近代剣道における切り返しの内容

近代剣道の切り返しの流れを見るとき、まず触れておかねばならないのは流派剣術の稽古と打ち

込み稽古である。流派剣術では示現流における「立木打ち」、柳生新陰流における「相懸返」「相懸流」等、「切り返し」という呼称ではないが太刀筋を連続して返すような動作の単身での修練や組太刀（勢法）がある。次に打ち込み稽古について中村は、もともと「撃ち込み稽古」と書き、今日いうところの「切り返し」「掛かり稽古」を併せもったものである。これが明治末年頃にまず「切り返し」が分離し、さらに大正末年頃に「掛かり稽古」が分かれて、三者は別々の運動形態をもつに至った<sup>3)</sup> といっている。つまり、防具と竹刀が発案された段階で、これまでの主修錬法であった形稽古に対抗する新たな稽古法（竹刀撃ち込み稽古）の1つであり、それまで出来なかった実際に相手に「打ち込む」ことを可能にした稽古の総称であったといえる。また切り返しの原型は、直心影流・韜之形（又は「十之形」）の一本目「龍尾」に見ることができ「此業則龍尾名所也。首を打てば尾が来る、尾を打てば首が来るの意にて、右を打てば左へ切り返し、左を打てば右へ切り返すという所也。」<sup>3)</sup> とあり、「切り返し」という単独の技術・運動形態ではなく、古くは形稽古の中の、あるいは前述の（打ち込み）稽古の一貫として捉えられていた。

表2（2-1、2-2）、表3（3-1、3-2）、表4（4-1～4-7）は切り返しが単独の技術・運動形態として説明されるようになったものを、その内容について方法、目的、効果等の項目に分けてまとめたものである。尚、日本の時代区分に則り、表2を明治期、表3を大正期、表4を昭和初期とし、それぞれに刊行された代表的な書物についてまとめた。

#### 表2. 明治期にみられる切り返しについて

「武道教範抄」(表2-1)<sup>4)</sup> の第4章に切り返しとあり、切り返しが単独の項目として取り扱われているのはこれが初めてのようである。しかしその内容は、太刀を上段（すなわち兵字）に冠ぶり、十字形に切り結ぶとあり、技を出した方向とは逆の方向に上段より太刀を返す運動を兵式号令を用いて演習するものとしている。その際の打突部位は明記されておらず、技術・運動形態として

取り扱われてはいない。しかし切り返しの目的、それによって得られる効果等は「胆力の鍛錬」「四肢の凝硬を除去し、筋力を靱剛にする」など現在の切り返しの内容の原型といえるものが記されている。

表2-2の「剣道要覧」<sup>5)</sup>がその内容からみても、単独の技術・運動形態として初めて取り扱われている。<sup>7)</sup> 要約すると、清眼(中段)の構えより上段に振りかぶり相手の表(左)面を打つ。相手が受け止めた時はただちに上段に振りかぶり裏(右)面を打つ。この表裏の面を矢筈掛けに打ち込み、体力・呼吸の続く限り流水の如く気剣体(心形刀)一致して行い、最後に(大)上段に振りかぶり正面を打って終わると説明されている。特徴的なのは、上段にかぶり表裏の面を「矢筈掛け」に打ち込む、最後の正面打ちは気剣体の一致した大技で打つことが強調されていることである。そして切り返しはあくまで単独で、もしくは上級者(師範、先生)に向かって行うものであるとして定義づけられており、打ち方の説明はされているが現在のような受け方(元立ち)の説明はない。

前述したように、明治末期頃に切り返しが打ち込み稽古より分かれたことから切り返す動作そのものを、現在でいう「連続左右面打ち」を「切り返し」と呼んでいた。しかし、その目的、効果

2-1. 「武道教範」抄<sup>4)</sup>にみられる「切り返し」の内容

「武道教範」抄	隈元実道, 明治28年刊
方法	1. 太刀を上段に冠ぶり, 十字形に切り結ぶ 2. 兵式号令を用いての演習
目的	1. 太刀捌きを敏速にする 2. 剣術の基本 3. 胆力の鍛錬 4. 日本古来の白兵術に練達する
効果	1. 四肢の凝硬を除去して, 筋力を靱剛にする 2. 身体の動作を練習して, 拳止を敏捷にする 3. 靈眼を聡活にする 4. 刀勢を快速にする
その他	

等は今に通ずるものが既に構築されていたといえる。

表2-2. 「剣道要覧」<sup>5)</sup>にみられる「切り返し」の内容

「剣道要覧」	小関教政, 明治45年刊
方法	1. 清眼の構えにて立ち上がり, 相手の掛け声を発したる時, 上段に振りかぶり相手の表面に左右の手を延ばし, 左右の足を踏み込み撃ち込む。 2. 相手が受けとめたる時は直ぐに元のごとく上段にかぶり, 裏面に前同様に撃ち込む。 3. 表裏の面を矢筈掛けに烈しく精神を込め脇見せず, 一心不乱腕と息の続く限り流水のごとく休みなく, 大きく早く手足を一致にし, 心形刀の本旨に適うよう撃ち込む。 4. 腕疲れ息尽きたるときは大上段に振りかぶり正面を撃つ 5. 進は右足より, 引くに左足よりする。 6. 間合いは遠くに離れ, 切つ先より三寸下がった物打ちの所で撃つ。
目的	1. 剣術を学ぶ基本 2. 姿勢を正しくする。 3. 前後左右の展開を速やかにする。 4. 氣息を永続し, 動作を機敏にする。 5. 心形刀の一致 6. 悪力ある者には悪力を抜き, 弱力者には力を付ける。 7. 左右の腕力を平均し, 表裏撃ち方の力を均一にし, 手の旋えり足の運びを速やかにする。 8. 体力の増進
効果	1. 体の開展手足柔らかく意のごとく活動できる。 2. 眼が明らかになる。 3. 無念無想心形刀の一致を得る。
その他	1. 左右の切り返しを練習すべし。 2. 初学者は必ず初めより道具を用いず相互の試合をなさず, 素面にて上級者に向かって充分切り返しを練習すべし。

表3. 大正期にみられる切り返しについて

大正期にみられる内容は明治末期に構築されたものとあまり変容することなく、その内容を踏まえた上でさらに解り易く、具体的に説明するという傾向にある。

大正四年に書かれた高野佐三郎著「剣道」<sup>6)</sup>(表3-1参照)は、現在でも斯界の聖書的存在で

表3-1. 「剣道」<sup>6)</sup>にみられる「切り返し」の内容

「剣道」	高野佐三郎, 大正4年刊
方法	1. 中段の構えにて立ち上がり、敵手の掛け声を発した時、上段に振りかぶり左右の手を伸ばし、左右の足を踏み込み、敵手の表面へ打ち込む。これを受けとめられた時はただちに前のごとく上段にかぶり裏面に打ち込む。 2. 表裏の面を交互矢筈掛けに精神を込め一心不乱に体力気息の続く限り少しの休みなく大きく早く、手脚をともし心気力を一致にして烈しく打ち込む。 3. 腕疲れ息尽きたる時は、上段にかぶり正面に両腕を伸ばし両足を進め、「面」と大声を發し充分に打ち込みで後退して休息する。 4. 進は右足、退くには左足よりする。 5. 間合いはなるべく遠く離れ、鐙元にて撃たず剣尖より約五寸下りたる物打ちで撃つ。
目的	1. 剣道を学ぶ者に欠くべからざる練習 2. 電光石火の妙技を施し、永く労苦困憊にも堪えうる基礎を養い得る。
効果	1. 前後左右の進退を軽捷にする。 2. 身体手脚の力量を増し、その動作を軽妙自在にする。 3. 氣息を永く刺撃刺突を正確自在、心気力の一致 4. 悪力を去り、力の足りない者の力を増す。 5. 左右の腕力を平均に発達させ、表裏の撃ち方を均一にする。
その他	1. 切り返しは進歩の捷徑 2. 単独の練習 3. 撃ち込み練習の必要

あり、今村は「本書は近代から現代にかけての剣道書の最高峰に位置しているといっても過賞ではあるまい。(中略)本書によって近代(現代)剣道はスタートしたといっても過言ではあるまい。」<sup>10)</sup>と述べている。表3-2についても同様な傾向であり、富永氏も高野門下(東京高師)であり、剣道の正しい内容(技法)の指導に徹するのを目的に書かれた内容であり、切り返しにおいてはその主たるものであるといえる。

このように剣道史の変遷からみた大正期は、近世(流派)剣術が近代化し、剣道と呼ばれ普及してきた時期であり、切り返しについても単独の技術・運動形態としてはほぼ確立されてきた頃であったといえる。内容としては左右の面を気力・体力の続く限り連続して打ち込み、切り返して、最後に(最高の)正面打ちを打つことが、自己の修行・

表3-2. 「最も実際のな学生剣道の粋」<sup>9)</sup>にみられる「切り返し」の内容

「最も実際のな学生剣道の粋」	富永堅吾, 大正14年刊
方法	1. 体勢を整え、気合いをこめて右足より踏むと同時に、刀を振りかぶり、切先を右に回して相手の左面を撃ち、次に振りかぶって切先を左に回して右面を撃ち、左面、右面と交互に矢筈掛に撃つ。 2. これを反復して、腕が疲れ、息が迫れば、間合いをやや遠ざかり、遠間から踏み込んで正面を撃つ。 3. 精神をこめて、体力の続く限りどンドン反復練習する。 4. 普通の稽古とともに常に練習すべきである。
目的	1. 稽古の基礎を養う。 2. 精神を鍛錬する。
効果	1. 体勢を整え、身体の凝りを取り去って柔軟にし手の捌きを良くする。 2. 腕力を増し、撃ちを自在にしかも強く、かつ正確にする。 3. 体力を練り、持久力を増し、動作を軽捷にする。
その他	1. 剣道基礎修練の方法 2. 最も有効なのは教師に向かって撃突し、また切り返しを行うことで、最も多くの効を収め得ることが出来る。

指導において剣道の基礎（地力）をつける第一だ  
というものであるが、まだ方法として最初の正面  
打ち「切り返し」の内容に入ってきていない。

表4. 昭和初期にみられる切り返しについて

表4-1. 「新制剣道教科書」<sup>9)</sup> にみられる「切り返し」の内容

「新制剣道教科書」	斎村五郎・金子近次, 昭和6年刊
種類 (方法)	1. その場左右面連続撃 (その場で切り返すもの) 2. 前進切り返し (前進しつつ切り返すもの) 3. 後退切り返し 4. 前進後退連続切り返し (前進切り返しと後退切り返しとを連続して行うもの) 5. 撃ち込み切り返し
目的	1. 刀を体になじませる練習
効果	1. 動作を自由にかつ軽捷にする。 2. 手のさばきをよくし、体勢を整える。
その他	1. 撃ち込み切り返しに対する応じ方

表4-2. 「一刀正伝無刀流剣道教典」<sup>12)</sup> にみられる「切り返し」の内容

「一刀正伝無刀流剣道教典」	峯房一, 昭和19年刊
方法	1. 遠間から大きく振り冠って正面を撃ち、次に敵の左面 (表面) を撃ち、ただちに前のごとく振り冠り敵の右面 (裏面) に撃ち込む。 2. 表裏の面を互いに表三回裏二回合わせて五回を撃ち、さらに遠間となり始めのように正面を撃ち、疲れるまで繰り返して行う。
目的	1. 心手足一致の妙境に入り得る。
効果	1. 業が烈しく早くなる。 2. 打ちが強くなる。 3. 息合が永くなる。 4. 腕の働きが自由になる。 5. 自体が軽く自在になる。 6. 臍下納まり体が崩れなくなる。 7. 眼が明らかになる。 8. 打ち間が明らかになる。 9. 手の内が軽く冴え出る。 10. 心気力一致を会得する。
その他	

表4-3. 「剣道講話」<sup>7)</sup> にみられる「切り返し」の内容

「剣道講話」	堀田捨次郎, 昭和10年刊
方法	1. 体は自然体で竹刀を体の中央にとつて構え、これより上段となり、左右の横面へ充分両手を伸ばして打ち込む。打ち込み数回にして真向面を打ち、全体の凝りを取り去り背骨を正しく両足のさばきをよくする。 2. 構えより上段となり、正面を前進して打つ。その位置にて左の斜面を上段より数回打つ。斜面打ち込みは、相手が退れば進み、進めば退り、足は前後足追しまた両手は頭上より斜めに返し、刃筋及び上体を正しくして打つ。これを体の疲れるまで連続して練習するのである。練習するとき、打ち込むと同時にヤー、エーとかまたは面、面、と下腹より力を入れ大きな声を掛ける。また上段より左右の打ち込みは同一の力と返しになすこと。
目的	1. (剣道の) 術理を悟ること
効果	1. 竹刀の捌きをよくする。 2. 全体の自由及び刃筋を正確にする。
その他	1. 「切り返し」としてではなく、「打ち込み稽古」としてその内容を取り扱っている。その要因は、この書が大正7年刊の「剣道の極意」をベースにしているからである。

表4-4. 「剣道解説」<sup>10)</sup> にみられる「切り返し」の内容

「剣道解説」	剣道教育研究会, 昭和11年刊
方法	1. 敵の左右の面を切り返す動作 2. 先生・上位の人に対して切り返しを行う。 3. 互格の場合には、交互に行う。 4. 「前進切り返し」「後退切り返し」を適宜考えて行う。
目的	1. 最後の一本の正面打ちを得るため
効果	1. 身体の動作を自在かつ敏捷にする。 2. 身体・手足の力を増す。 3. 呼吸を長く、息切れのしないようにする。 4. 左右の腕の力を平均にし、正確な技を修得する。
その他	1. 普通稽古の前には、必ず切り返しを行うがよろしく、あるいは交互に「その場切り返し」を行うも良い。

表4-5. 「改訂帝国剣道教本」<sup>9)</sup> にみられる「切り返し」の内容

「改訂帝国剣道教本」	小川金之助, 昭和12年刊
方法	1. 応じ方は一足一刀の間合いをとり刀を右に開き正面をあける。 2. 打ち方は（その機を隙さず）正しき中段の構えより、気合いをこめ、刀を大きく振り被り、踏み込んで相手の正面を撃つ。 3. 応じ方の前進・後退の度合いに応じて、左右面連続撃ちの要領で前進あるいは後退して切り返す。 4. 応じ方は真直ぐに立て、打ち方と呼吸を合わせながら左面・右面と応ずる。（中略）数回左右面連続撃ちを応じた後、機を見てさらに一足一刀の間合いをとり、刀を右に開いて正面をあける。 5. 打ち方は（またこの機を隙さず）正面に撃ち込む。この動作を体力・気力の続く限り、繰り返して行い、最期に正面を撃って止める。
目的	1. 剣道の上達
効果	1. 進退動作が軽妙自在になる。 2. 息が永くなる。 3. 撃突が正確自在になる。 4. 体力・気力が増し、気・剣・体の三つが一致した動作が行える。
その他	

表4-1～7は昭和初期にみられる切り返しの内容である。

表4-1では切り返しの方法を4種類（その場切り返し、前進切り返し、後退切り返し、前進後退切り返し）に分け、説明している。この種類分けは今までになかったことであり、それぞれの段階において切り返しを習得させるための配慮だと考えられる。本文ではこの4種類の切り返しを習得させた上で、刀を体になじませる練習である「撃ち込み切り返し」を習得させるように書かれている。「撃ち込み切り返し」の要領（方法）は、次の通りである。<sup>9)</sup>

- ① 大きく振りかぶって正面を撃つ。
- ② 一歩退きながら刀を振りかぶって左面を撃つ。

表4-6. 「剣道の理論と実際」<sup>10)</sup> にみられる「切り返し」の内容

「剣道の理論と実際」	縄田忠雄, 昭和12年刊
方法	1. 相手の面の隙を見て、大きく気剣体一致で正面に打ち込み体当たりをなし、その気の尽きざるうちに間合いを考え前後左右に開閉進退を自由自在にして、ほぼ物打ちにて相手の左面、右面と左右交互に五回切り返して、さらに遠間に切って思いきり烈しく大きく正面に打ち込み体当たりをなす。氣息体力の続く限りこの動作を反復して最後に正面を撃って終わる。
目的	1. 剣道上達の捷徑
効果	1. 気剣体が一致する。 2. 手の内が締まって手の冴えが出る。 3. 刃筋が正確になる。 4. 体の備えが堅確となる。 5. 動作・進退が自由軽妙となる。 6. 刀の運用が自在巧妙となる。 7. 体力・臍力を増進する。 8. 悪力がぬける。 9. 撃間を知る。 10. 決断力と勇猛心を増す。
その他	1. 稽古の時間の始めと終わり（これはその時間の準備運動・終末運動ともなりて、その運動を体育的に合理化するの利もある）また一回の稽古の終わりには必ずこの切り返しを行って止めるよう心掛けることが肝要。

- ③ 同様に退きながら右面を撃つ。
- ④ 同様に退きながら左面を撃つ。
- ⑤ 一歩大きく退いて中段に構える（以上のことを繰り返して、中段に構えながら左足から一歩退く。）

ここでも現在の切り返しと違い、最初の正面撃ちは撃ち込みとして捉えている。しかし、内容がパターン化（左右面が3本）しており、序々にであるが現在の切り返しの内容に近くなってきているといえる。

また特徴的なのは、切り返しの1つ1つについ

表4-7. 「剣道読本」<sup>13)</sup> にみられる「切り返し」の内容

「剣道読本」	野間恒, 昭和14年刊
方法	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 遠間から十分な掛け声をかけ、思い切って大きく真っ直ぐに面に打ち込む。</li> <li>2. 左右の斜面をこもこも五回ないし七回切り返し、再び十分に間合いを切って面に打ち込み、これを繰り返す。</li> </ol>
目的	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 剣道基本の修得</li> <li>2. 剣道修行者の必ず行うべき方法</li> </ol>
効果	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 姿勢が良くなる。</li> <li>2. 業が烈しくなる。</li> <li>3. 息が永くなる。</li> <li>4. 打ちが強くて確実になる。</li> <li>5. 肩の関節が柔軟になる。</li> <li>6. 手の内の冴えがでてくる。</li> <li>7. 腕の働きが自由自在となる。</li> <li>8. 体が軽く自在となる。</li> <li>9. 長い太刀が自由に使えるようになる。</li> <li>10. 体勢が崩れないようになる。</li> <li>11. 目が明らかになる。</li> <li>12. 業が速くなる。</li> <li>13. 足さばきが良くなる。</li> <li>14. 心が静かになる。</li> <li>15. 打ち間が明らかになる。</li> <li>16. 太刀筋が正しくなる。</li> <li>17. 遠間から打ち込めるようになる。</li> <li>18. 気力が強くなる。</li> <li>19. 腕が丈夫になる。</li> <li>20. 体が丈夫になる。</li> </ol>
その他	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 業が思うようにならなくなった時、試合に自信を失ったとき、気分が乗らぬ時に最も有効である。</li> </ol>

て打ち方・応じ(受け)方に分けて解説していることである。明治・大正期まではあくまで単独の修練か先生(上級者)に対して行うものとされていたものが、同レベルの者がお互いに稽古するようになってきたといえ、切り返しにおける在り方・意義などが少しずつ変容してきたとも考えられる。

表4-2では左右面を切り返す本数を5本・7本・9本と指定している。現在切り返しの連続左右面は前進4本後退5本(計9本)を基本としいることから、ここでほぼ現在のスタイルになっ

てきたことが解る。しかしこの書では最後の正面打ちが入っていない。また峯は「撃ち込み・切り返しは剣道練習上欠くべからざるものである。小野忠於はこの撃ち込み・切り返しに相当する自己発明になるところの合刃・張の組太刀を三年間も行ったといわれている」<sup>12)</sup> といっている。剣道を修練するに於いて打ち込み・切り返し三年といわれるが、これはその原文といえるのではないかと考えられる。

そして現在の切り返しのベースともとれる内容が表4-4「剣道解説」<sup>14)</sup> にみられる。

「剣道解説」は昭和11年(1936年)6月3日付の「文部省訓令第十八号」をもって公布された第二次改正の「学校体操教授要目」に準拠して剣道部門について書かれたものである。その内容は「切り返しというのは、敵の左右の面を切り返す動作である。切り返しは、剣道修業上、最も重要なもので、独り初学者ばかりでなく、相当上達した者でも、充分に行う必要がある。」<sup>14)</sup> と定義づけている。さらに「撃ち込む者は、撃ち込むだけ、応ずるほうは、応ずるだけで行う。すなわち先生・上位の人に対して行うのであるが、互格の場合には、交互にこれを行う。最初充分に間合いを取り、気の充分に熟したところで、満身気力と力を込めて、正面に撃ち込み、そのまま右足から一歩進めると同時に左面を撃ち、さらにただちに上段に振りかぶって中段にかえらずに右面に切り返す。これを適宜繰り返して、さらに左足から退きながら、左右の面を交互に切り返し、ころあいを計って、一歩退き中段に構え、間合いを計って、満身の元氣と気合いとをもって、正面に撃ち込むのである。(中略)この切り返しはいわば、最後の一本の正面撃ちを得るために切り返しを行う」<sup>14)</sup> と方法論でも現在とほぼ変わりのない内容になっている。

故に「切り返し」は近世から近代にかけて防具・竹刀の発明により、稽古法が形(型)稽古から竹刀打ち込み稽古に移り変わってきた中で、明治期において左右の面を切り返すという運動形態が剣道の基礎をつくる稽古法として定められ、「撃ち込み・切り返し」として用いられた。そしてその内容は、大正から昭和初期にかけて、指導の際によ



り具体的な表現を用いながらも本質を変えることなく受け継がれ、昭和初期において「正面打ちから左右連続面打ち、最後に正面打ち」という運動方法が、一般に「切り返し」と呼ばれ、それが定着したことが（書物から）読みとれる。

## ま と め

近代から現代にかけての剣道の基本「切り返し」に関する内容を、幼少年剣道指導要領及び近代剣道名著大系の中から選出・検討してきたのをまとめると次のようになった。

1. 「切り返し」は剣道（この場合竹刀打ち剣道を指す）を修練するにおいて最も大切な稽古法である。（目的）
2. 本来の「切り返し」の意味は表から裏、左から右に連続して太刀を返すことにあり、一般に左右の面を打ち返すことである。
3. 「切り返し」における効果は、明治後期頃には既に構築されていた。
4. 剣道が普及されるにつれ、本来、単独で修業するか上級者に掛かるものであったのが、昭和初期頃には元立ちを交代して、交互に行う稽古形態へと変わってきた。
5. 指導する内容については、「十字形に切る」「左右の面を矢筈掛けに切る」等の表現から「左右均等45度ぐらいで打つ」に、より解り易い表現を用いられるようになった。
6. 「切り返し」が単独の技術・運動形態としての内容を初めて取り扱ったのが「剣道要覧」<sup>3) 5)</sup>であり、この書を元に、それ以後、内容が厳選・洗練されていき、「剣道解説」（昭和11年刊）で現在の切り返しのベースになる内容（方法、目的、効果及び指導上の留意点）が明記された。
7. 現代剣道における切り返しの位置づけは基本的動作の総合稽古法として捉えられている。

## 文 献

1. 全日本剣道連盟，幼少年剣道指導要領，3版，1986，pp70-75
2. 井上正孝，剣道はこう学べ-その理論と実際，初版，

- 玉川大学出版部，pp76-78
3. 中村民雄，剣道事典-技術と文化の歴史-，初版，島津書房，1994，pp30-33
  4. 隈元実道，武道教範抄，近代剣道名著大系第1巻，初版，同朋舎出版，1986，pp206-209
  5. 小関教政，剣道要覧，近代剣道名著大系第1巻，初版，同朋舎出版，1986，pp387-388
  6. 高野佐三郎，剣道，近代剣道名著大系第3巻，初版，同朋舎出版，1986，pp78-80
  7. 堀田捨次郎，剣道講話，近代剣道名著大系第6巻，初版，同朋舎出版，1986，p134,241
  8. 富永堅吾，最も実的な学生剣道の粋，近代剣道名著大系第7巻，初版，同朋舎出版，1986，pp402-404
  9. 斎村五郎・金子近次，新制剣道教科書，近代剣道名著大系第9巻，初版，同朋舎出版，1986，pp139-141
  10. 小川金之助，改訂帝国剣道教本，近代剣道名著大系第9巻，初版，同朋舎出版，1986，pp282-283
  11. 繩田忠雄，剣道の理論と実際，近代剣道名著大系第11巻，初版，同朋舎出版，1986，pp116-119
  12. 峯房一，一刀正伝無刀流剣道教典，近代剣道名著大系第12巻，初版，同朋舎出版，1986，pp34-35
  13. 野間恒，剣道読本，近代剣道名著大系第12巻，初版，同朋舎出版，1986，pp155-157
  14. 剣道教育研究会，剣道解説，近代剣道名著大系第12巻，初版，同朋舎出版，1986，pp327-330
  15. 今村嘉雄，解題，近代剣道名著大系第3巻，初版，同朋舎出版，1986，p419